

第4学年 国語科

「相手を意識して話し方を工夫しよう

～報告します，みんなの生活～」



香川大学教育学部附属坂出小学校  
教諭 尼子 智悠

## 通常学級の担任ができる特別支援教育の視点からの支援の実際

指導案にも子供の実態として述べているが、教師の見取りから、本学級には、特別に支援が必要な子供が数名いる。そこで、本校の研究副主題にもあるように、「個に応じた支援」を考えていくためにも、香川大学教育学部教授 武藏弘文先生（特別支援教室すばる室長）、教育学部准教授 中島栄美子先生（特別支援教室すばる主任相談員）に、これまでに何度も授業を見ていただき、ご指導をいただいた。

研究会当日も、武藏先生には授業を参観いただき、ご指導をいただくこととなっているが、これまでにアドバイスいただいたことも、普段の授業をつくったり、授業を行ったりしていく中で、重要な視点である。

ここで、これまでにアドバイスいただいたことを紹介することで、少しでもご参会いただいた先生方の、普段の授業づくりの参考になればと思っている。

<実態①> 衝動性、多動性という面から友達との関わりに困難があり、自尊感情が低い。また、じっと話を聞くことが苦手。

- SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）を、ねらいをしばって行うことで、よい行動を増やしていくとともに、自尊感情を高める。

### 実際に行った SST の例

#### 例 1

<ねらい> よい話の聞き方を定着させる。

- <活動>
- ① よい話の聞き方について、どのような聞き方がよいか学級全員で確認する。
  - ② 実際にその聞き方で、代表の友達の話聞く。
  - ③ 数人繰り返し、できていたかどうか確認する。
  - ④ 感想を伝え合う。

#### <活動後のアドバイス>

- ・ 上記実践では、できたかどうか評価できる人が教師しかいなかったため、できていた子供への評価（称賛）が少なかった。改善案として、学級で一人が話をして、残りの全員が聞くのではなく、少人数（4人程度）の班を作り、「話す人」「聞く人」「評価する人」に分かれて、すぐに評価できる形態をとるのがよかったのではないか。よい行動を強化していくためには、「できた」という経験を数多く繰り返すことが大切である。短時間でも、できたら友達にすぐに評価してもらうことで、よい行動の強化につながる。教師に称賛されることも大切だが、友達に称賛してもらえる機会をもっと増やすとよいだろう。

## 例2

<ねらい> 同じ事象を見たり、体験したりしても人には様々な感じ方があることを知る。

- <活動>
- ① 絵カード\*を見せ、どのような場面か想像させる。
  - ② どのような場面だと思ったか想像したことを数人に発表させ、人によって想像したことが違うことを確認する。
  - ③ 新たに「友達のお母さんがお弁当のようなものを持って、道の向こうにいる子供に何か伝えようとしており、自分はそれを近くで見ている」絵カード\*を見せ、「お母さん」と、「自分」はそれぞれどのようなことを言っていると思うかを班の中で順番に紹介する。
  - ④ 感想を伝え合う。

※特別支援学校すばるで個別指導に使っている絵カードを通常学級で使用した。

### <活動後のアドバイス>

- ・ 活動②で、本時にねらいとすることを、子どもたちに実感させたのはよかった。ただ、その後、そのことを板書するなどして、今日の活動のねらいをもっとはつきりさせると、より効果的だっただろう。また、活動②で、子供たちの普段の生活の中でも、同じような経験がないか尋ねるなどして、自分の生活とつなげるような声かけをすることもしたらよかったのではないか。活動は班での活動だったので、友達の話も聞きやすく、ねらいとしていたことも感じることができていたのではないだろうか。

- SST でしたことを普段の学校生活に生かすことができるようにし、よい行動を強化していく。

### <アドバイス>

- ・ 特に、落ち着いて話を聞くことに焦点を絞って強化していけばよいのではないか。そのために、頑張り週間を設けて、一週間単位で取り組みをしていくことが考えられる。話をする時と、聞く時の切り替えが難しいようなので、何か合図を決めておくとよい。例えば、話を聞くべき時には、静かにする時だということが分かる右のようなイラストを黒板に貼るなど、工夫してみてもどうか。また、班ごとに評価してポイント制にすることも試してみるのもよいのではないか。



アドバイスを受けて、頑張り週間を設けて、実践することとした。ご指導いただい

たように、イラストを使うことも考えたが、黒板のスペースを使用しなければいけないことなども考え、普段使っている指示棒を、教師が顔の前に縦に持って示すことを、その合図とすることにした。班のポイント制にすることには、班の中でできていないことを非難し合わないか、という心配もあったが、実際にしてみると、よい聞き方で聞けるように班の中で声をかけあって、できていたので、班ごとに評価することも継続して行っている。

＜実態②＞ 衝動性、多動性という面から、集中して学習することを続けることに困難がある。

- 授業の中の関わり方や教具の作り方を工夫することで、繰り返し授業に集中できるようにする。

＜アドバイス＞

**関わり方**

- ・ 授業が始まっても、取りかかることが遅いように感じた。本人の中で切り替えがうまくいっていないのではないだろうか。本時のめあてをみんなで確認していたが、本当にめあてが分かっているのかを確認する必要があるかもしれない。挙手はしていなくても、「○○さん分かったかな」などと名前を呼んで個別に声をかけるようにすることで、意識が授業に向きやすくなる。要所要所で、こまめに声をかけることで、今何をしているのかを確認することが大切である。
- ・ 人と関わることや注目されることは、嫌ではないようなので、よいところで注目を浴びることができるようにしていくことが大事である。できそうな問いは先に指名することや、できたことやよかったことを自分自身で振り返ることができるような機会をつくることも、自尊感情の高まりにつながる。

**教具など**

- ・ ノートを書くことも苦手なようだが、先生がワークシートを用意している時は、比較的書くことができていた。ノートではなく、どこに何を書くのかが分かりやすいワークシートを用意することも、有効なことだろう。
- ・ 説明をずっと聞くことは難しいようである。イラストなどを使って、まとめられているような視覚的な支援が必要になるだろう。多数の子供が、言葉だけで伝わるところも、視覚的な支援をすることが必要な時があることを意識しておくといよい。

## 参考文献

- 「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編」  
2018, 文部科学省, 東洋館出版社
- 「話す力・聞く力の基礎基本」2008, 井上一郎, 明治図書出版
- 「話す力・聞く力の基礎基本を育てる 小学校 上」2008, 井上一郎, 明治図書出版
- 「話す力・聞く力の基礎基本を育てる 小学校 下」2008, 井上一郎, 明治図書出版
- 「小学校国語科質の高い言語活動パーフェクトガイド1・2年」  
「小学校国語科質の高い言語活動パーフェクトガイド3・4年」  
2018, 水戸部修治, 明示図書出版
- 「特別支援教育のための分かって動けて学び合う授業デザイン」  
2016, 藤原義博・武蔵弘文監修, 株式会社ジアース教育新社